



Title	北米クマ研究事情
Author(s)	間野, 勉
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 45-63
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91583">http://hdl.handle.net/2115/91583</a>
Type	report
File Information	kikou_mano.pdf



[Instructions for use](#)

## 北米クマ研究事情

間 野 勉

### 1. 湖の州ミネソタのクロクマ

3月2日午後9時23分、メサバ航空1059便、14人乗りの小型双発機は4人の乗客を乗せて、定刻より50分遅れてグランド・ラピッズ空港に着陸した。空港まで私を出迎えた33歳の青年研究者は、家に向かう車の中で翌日からの予定を告げた。「君は明日には私と一緒に第一の冬眠穴を訪れる。この穴には親子がいるはずだ。明後日には航空機に乗って調査地の森林環境を見ることにしよう。3月5日には別の冬眠穴を訪れて発信器をとりつける予定だよ。そこには茶色い毛をしたクロクマの親子がいるのだ。」聞くこと全てが驚きの連続で、昨夜からの疲れも忘れてしまった。

デヴィット・ガーシェリスさんはミネソタ州天然資源局の野生生物研究者である。2年前からここミネソタ州のグランド・ラピッズでアメリカクロクマの生態研究をしている。クロクマの冬眠明け前の時期にあたる3月上旬より下旬まで、これまでにテレメーターを装着してある個体の発信器の交換、あるいは新しく生れた個体に新たに装着するために、およそ20の冬眠穴を一つずつ訪れるという。かねてからアメリカにおけるクマの研究のフィールドにおける現状と、アメリカのクマの生息環境を実際に見てみたいと思っていた私は、ウィリアムズバーグの会議場で彼と知り合い、クマ会議後に訪問し調査に同行したい旨を伝えた。ガーシェリスさんは初対面の私の申し入れを、快く承諾して下さった。

ミネアポリスでの悪夢のような一夜とはうってかわって、ひさしぶりに心地よい朝を迎えた。ガーシェリスさんの3歳になる息子さんを託児所まで送ってから、研究室のある州天然資源局魚類鳥獣部の研究支所へと向かった。オフィスはグランド・ラピッズの市街地にあり、すぐ横をミシシッピ川の源流が流れている。幅はわずか30メートルくらいで、「ここまでくるとさすがのミシシッピ川も小さい」とガーシェリスさんは笑った。

9時30分にオフィスを助手のキーンさんと3人で四輪駆動のトラックで出発、約10キロメートル離れたところにある調査地へと向かう。気温は氷点下5度位だろうか。「この気温は平年なみか」、と聞くと「異常に暖かだ、例年なら氷点下40度くらいまで下がる日もある」、とガーシェリスさん。北国の空はどんよりと曇っていた。乾いた舗装道路を20分ほど走った後に車は右折し、雪で覆われた林道へと入った。やがて車を止めたのは伐採跡地の中の林道の分岐。ドロノキやカエデが伐採跡地に更新しているのが目につく。麻醉捕獲に必要な重い器材と、全長1.5メートルはあるスノーシューズを担いで、スノーモービルの跡が続く歩道をたどって林内にわけいった。積雪はおよそ50センチメートル。よく締まっており、歩くの

に苦はない。歩道の両脇は低くなって沼になっているが、結氷していて白く見える。カンバ、ドロノキ、カエデなどの広葉樹とバルサムモミ、ジャックマツなどの針葉樹が混交しており、天塩演習林の河西の低い尾根の上を歩いているようだ。15分ほど歩くと目の前が開け、幅200メートル、奥行き1キロメートルほどの白い平原が現れた。結氷した湖だ。スノーモービルの跡は湖の中へと続いている。4月の初めまでは氷も安定して通行に支障はないという。薄日が差した。3つの人影は、白い平原へと進んでいった。

ガーシェリスさんが立ちどまった。あらかじめ航空機で大雑把に位置を押さえてあったクマの冬眠穴に近づいたのである。アンテナを組み立て肩から下げた受信機にケーブルを接続すると、レシーバーに耳をあてスイッチをいれた。メーターが振れている。我々はスノーシューズをはき、平坦な湖面から岸へと雪をこいであがっていった。

「近い！」先頭をアンテナを振りかざしながら進むガーシェリスさんが小声でつぶやいた。彼はスノーシューズを脱ぐと、膝上までの雪をこいでバルサムモミの陰へと消えた。キーンさんはガーシェリスさんが降ろしていった重い器材も持ち上げて、注意深く後に続く。約10メートル進んだところでガーシェリスさんは倒木の下をのぞきこんでいた。私に「来い」と手招きをする。恐る恐る近づきのぞきこむと、黒い毛の固まりが見えた。穏やかに息づいている。初めて会う野生のアメリカクロクマだ。ドロノキとカンバが多い明るい林内は、風もなく静まりかえっていた。

冬眠穴には昨年の冬に生まれた満1歳1カ月になる子を二頭連れた親子グマがいた。親グマは昨年6月にオリワナで捕獲し、発信器をとりつけてあった。そのとき子はみあたらなかったもので、いるとすれば今年生まれたばかりの子がいると思ったそうだ。

キーンさんが長さ1メートル位の棒を切り取ってきて注射筒を棒の先にとりつけると、ガーシェリスさんは穴の入り口に膝をつき、かがみこんで中をうかがった。母グマから麻酔を開始した。針が刺さった瞬間、ピクリと動いただけで、麻酔薬は何事もなく母グマの体内に注入されていった。続いて子グマだ。「やってみるか？」ガーシェリスさんがいたずらっぽく笑う。私は緊張して打ち込むタイミングをうかがった。指示された場所に一気に突き刺し、「ゆっくり、ゆっくり」という掛け声を耳に全量を注入した。小さな体はかすかにうめいて母グマの腹の下にもぐりこんだ。一羽のチッカディー（カラの仲間）が、作業しているすぐ脇の枝にとまり、人なつこく



冬眠穴でクロクマの体重を測定する。ミネソタ州グランド・ラピッズにて。

さえずった。

二頭の子グマから穴の外に引き出し、耳標の装着、体重の測定と作業は進んでいった。オスとメスそれぞれ一頭ずつで、体重はおよそ16キログラム、オスの子には約6ヶ月後に自動的に脱落する仕組みの首輪をつけた。オスは親から別れたあと、遠くまで行ってしまふことが多いので、首輪を交換することが困難であり、成長に伴って首が締まるのを防ぐため、という。ガーシェリスさんは首輪の締め具合を何回も様子を見て慎重に決定した。採血、直腸温の測定、体測、体毛の採取、最後に入れ墨の機械を用いて上唇内部に入れ墨をする。続けて穴から引き出した親グマの体重はおよそ44キログラム。エゾヒグマの半分から三分の一の重さだ。こちらにはすでに耳標と首輪がついているが、首輪は採食行動のアクティビティを測定できるようにと、頭部が水平か否かでピッチが変化する発信器がついたものに取り替えた。

約2時間半で全ての作業を終え、クマたちをもとの穴に戻した。母グマは目をあけてこちらを見ている。体は動かないが意識はあるのだろう。このクマが人間に恨みをもって将来襲ってくることはないか、と聞いた。ガーシェリスさんは笑いながら言った。「そのようなことはこれまでもなかったし、これからもないだろう」。

\*

\*

\*

その翌日は、週に一回の定期飛行でクマの位置を確定する日にあたっていた。午前10時半、両翼にアンテナのついたセスナ機は快晴の飛行場を離陸した。グランド・ラピッズの市街にあるパルプ工場の煙突から、白い煙が南風に乗って北へと流れている。5分足らずで調査地域の上空に到着した。ガーシェリスさんは周波数があらかじめ記憶されている二台の受信機にレシーバーを接続した。クマからの発信音を聞きとるとパイロットに旋回の合図をする。若い女性のパイロットは、合図を的確に受け取って電波の方向へと機を寄せてゆく。やがて機は、旋回の半径を狭めながら高度を落としてゆき、半径100メートルの中に目標を確定すると再び上昇、周波数を切り替えて別の個体を求めて飛んだ。およそ2時間の飛行で6頭のクマの位置と1頭のオオカミの位置を確認したが、そのたびにガーシェリスさんは窮屈な機内で地図上に位置を落としていった。



ミネソタ州のクロクマの生息地。白く見えるのは結氷した湖。

上空から見る調査地は地平線まで360度見渡せる平らな台地。雪で覆われた林床が透けて見える落葉広葉樹林、黒々と茂る針葉樹林がその境界を明確

に分けて分布している。森林の中に白く見えるのは無数の結氷した湖だ。標高差は最大で130メートル、天塩の河西よりも平坦で起伏がない。調査地域を縦横に走る林道は、この森林が林業経営の対象であることを示している。伐採跡地やマツの造林地も各所に見られ、林道脇の土場には集材トラックが小さく見えた。

ガーシェリスさんがここの植生について説明してくれた。「落葉広葉樹で多いのはカンバとドロノキ、カエデでこれらは二次林が多い。クロトウヒ（ブラックスプルス）はあのように水辺の湿地や大きい河川の氾濫原に純林を形成する。針葉樹で多いのは他にジャックマツで、造林地はアカマツだよ。この他にテムロックと呼ばれるカラマツの林がほらあれだ。」

上空から見た調査地の森林はそれぞれの構成が単純で、しかもその境界がはっきりとわかる。群落の構成は土壌条件でほぼ決定するようだ。私は説明を聞きながら、地形が複雑で起伏も激しく、構成する樹種も変化に富んだ北海道の森林を思い出していた。そして、これまでアメリカで行われてきたクマの行動追跡の結果では得られなかった新しい知見が北海道では得られるに違いない、と思い始めていた。

\*

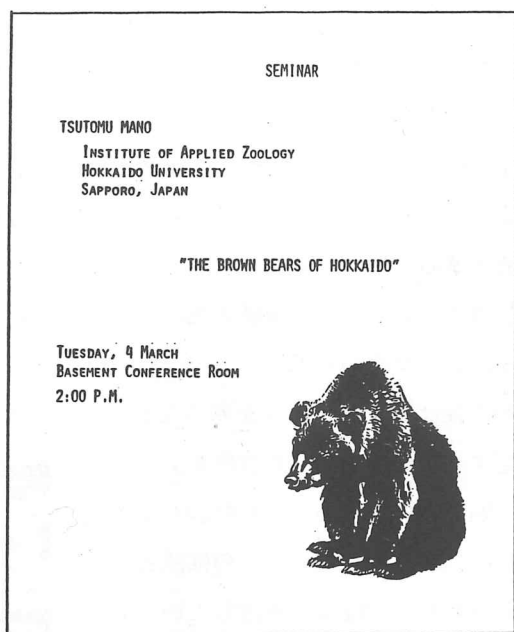
\*

\*

その日の午後2時から、鳥獣研究部のメンバーを相手に、北海道のヒグマと自然についてセミナーを行うことになった。前日の夜にガーシェリスさんの家で、私の持っていたわずかなスライドを見たときに、彼から翌日オフィスで話をするように頼まれた。びっくりする私に彼は、「あくまでも非公式なものだからリラックスしてやればよい。」クマ会議での原稿もすでに郵便で日本に送っていた私であるが、断るのは気が引けたし、腹を決めてやることにした。

2時になると、オフィスのあちこちにはあってあったポスターを見て、15人ほどのメンバーが地階にある会議室に集まってきた。ガーシェリスさんが私のことを紹介して、いよいよ発

表開始である。クマ会議で発表した内容に加えて北海道の自然のスライドなども見せて、30分足らずで終わった。発表後の質問はウィリアムズバーグのときと同じく、まず毎年300～400頭という捕獲数についてであった。北海道の面積をおよそ八万平方キロメートルと聞いて「そんなに狭い島で！」と驚き、次に春グマの一斉駆除について狩猟との違いを問いかけ



ガーシェリスさんがオフィスに貼りだしたセミナーのポスター。

てきた。これの説明に苦慮した。ヒグマは害獣として恐れ憎まれており、捕獲に制限が事実上ないことを説明すると、「それならば日本ではヒグマは絶滅させることになっているのか。」と聞いてくる。私がうまく説明できずにうなっていると、私の話をすでに聞いて、日本の現状を感じていたガーシェリスさんが、生態調査が行われなまま狩猟や駆除が許可されること、生息地の保護と野生生物の保護を共に考えていないことを説明した。参加者から溜め息が漏れ、一番窓よりにパイプをくゆらせながら座っていた鳥獣研究部のキャップが、顔をしかめて首を横に振った。現制度の明らかな矛盾を知る一人の日本人として、恥ずかしくまた悔しかった。

\*

\*

\*

ガーシェリスさんの家族は看護婦の奥さんと3歳になる息子さんの3人暮らしで、自宅は市街地から南へおよそ5キロメートル、静かなカンバの林の中にある。天気の良い日には家族揃って家の周囲でクロスカントリースキーを楽しむそうで、コースのトレイルが林の中に続いていた。家は半地下と一階の二層建てで、下は作業場とオガタンのような燃料を燃やす暖房室になっている。夕方4時半に仕事がひけるとガーシェリスさんは託児所に寄って息子さんを車にのせ、5時前には帰宅し夕食の準備をする。奥さんは車で1時間ほどの所にあるインディアン保護区で看護婦のボランティア活動をしていて、もっぱら食事の支度などは夫のガーシェリスさんの仕事である。

毎晩、夕食後のひとときは、居間で話をした。奥さんは活発な人で、話好きである。「現在、インディアン保護区では働かなくとも生活費が保証されているために、酒におぼれて退廃的な生活をおくっているものが多い。」とのことだ。また、十代の未婚の妊娠が問題になっているという。「保健衛生的な立場から啓蒙に努めているのだが、確かに性に対する無知はあるものの、根本的には、保護区の居住者に白人と対等の待遇を確立することが彼らの生活意欲をかきたて、問題の解決につながるのではないか。」と語った。あまり詳しく話せなかったが、現代のアメリカが抱える問題点の一つを見たような気がした。彼女は日本のことにも大変興味をもっていて、いろいろと質問してくる。日本の食べ物から自然のこと、さらには教育制度や学生の意識問題にまで話は及んだ。食べ物はさすがに場所を問わない共通の関心事のようで、アメリカの食事が口に合うか、日本にもマクドナルドやバーガーキングがあると聞いたが本当か、日本料理の店がミネアポリスにもあるがあれは本物か、など。またシタケに興味をもっていて、その栽培法について聞かれて困った。これには帰国後に文献を送ることを約束した。

いま二人目の子供がおなかの中にいる奥さんが早く床に就いたあとに、ガーシェリスさんと酒を呑みながら話をした。「どのように考えて保護管理のための研究をやっているのか。」とガーシェリスさんに問いかけてみた。彼から次のような答えが返ってきた。「林業を行う

のは人間のためだ。狩猟もそうだ。水系と漁業資源の管理もまた人間のためだ。それぞれがそれぞれの立場だけを考えていては当然うまくいかない。木材生産、狩猟、野生生物の保護、土砂流出防止、地下資源採掘、さらにリクリエーションなども含め、広い視野に立って森林開発を考える必要がある。その前提として森林局、鳥獣魚類局の管理官や研究者、狩猟者、また一般市民が同じ席で理解するように話し合う必要がある。その際に必要なのが基礎的な研究資料であって、それを調べているのだ。」

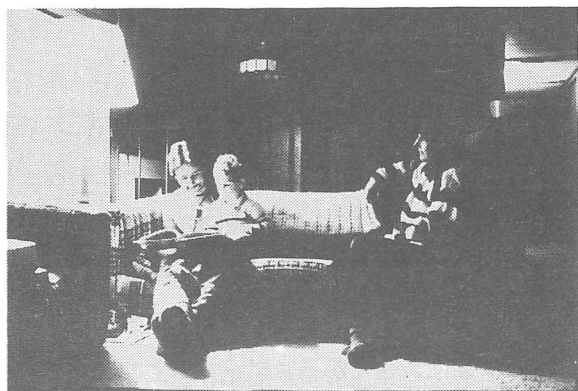
アメリカに比べて日本の狩猟人口ははるかに少ない。アメリカと全く同等に研究や対策を講ずる必要は日本ではないかもしれない。しかし、そこに生息する動物や水系の保護を無視した一少なくとも私には無視していると思わざるを得ないような伐採や造林の現場をたびたび見ている一視野の狭い森林開発によって、多くの地域で野生生物が衰退、絶滅してゆき、あるいは生息地を追われたクマによる被害が発生していることは疑いない。また被害防止を大儀名分にした「駆除」という名の無秩序な狩猟が行われているのも事実である。この現状を容認し、今後も場当たりの対策—まさに対策でしかない—を続けることは、先進国の名に恥じないだろうか。話をしながら、エゾヒグマをはじめとする日本の野生生物がおかれていた現状を思い、こう考えざるを得なかった。

さらに質問した。「話し合いはうまくいっているのか。」ガーシェリスさんは片目をつむって答えた。「異なる立場の人と話をするのは楽しいことではない。森林局は伐採制限をきらうし、狩猟者に捕獲の制限や調査協力を理解してもらうのは大変なことだ。」「しかし」と彼は付け加えた。「話し合うことはとても大切なことだ。」

アメリカでは大学の森林学を担当する学部または学科には、野生生物の生態や保護管理について教育研究する部門が必ずある。野生生物、特に大型動物の研究には多くの予算を必要とするので、ここで学ぶ大学院生は、大学から委託された州の魚類鳥獣局や国立公園局などの研究スタッフとともに研究プロジェクトを有給で分担しながら、研究指導がなされるというシステムがある。クマ会議の会場でも、「経費と研究の面倒はみるから、クマをやりたい意欲ある大学院生を募集する」という張り紙がしてあった。ガーシェリスさんのオフィスでも、フロリダの修士課程の大学院生を受け入れることになっているそうだった。彼は私が学部的时候には林学を専攻していたことを知って、「何故そのまま大学院に進まなかったのか。」と問いかけてきた。アメリカでは野生生物の保護管理はその生息地の保護管理と狩猟の管理の両面から検討される。つまり、生息地の改変に深くかかわる林業の問題を抜きに、野生生物の保護管理の問題は語れないのである。しかし、「いまだに日本では野生生物の適切な保護管理という概念が確立しておらず、本来なら保護管理の問題に直接関わる森林の開発や保護の問題は、そこに生息する野生生物のことを考慮せずに論議されることが是認されているのが実状だ。そのために林学の範疇には野生生物の問題は入らないとされている。」と答え

ると、あきれた様子で「しかしそれではうまくいかないのではないか。」と言われた。まさにそのとおりである。日本には野生生物の保護管理について研究する機関が実質的にないこと、クマの研究者がほとんどおらず、また野生生物の研究をバックアップする十分な予算や行政の協力が得られないことを説明した。それに対して彼は、ミネソタの研究体制について説明してくれた。

ミネソタ州天然資源局の本庁は州都のあるセントポールにあり、野生生物保護管理についての研究支所が州内に4カ所ある。ガーシェリスさんの勤める研究支所には鳥獣と魚類の基礎研究部門と管理部門があり総スタッフ数は82人、うち鳥獣基礎研究部門にはおよそ10人のメンバーが所属している。ミ



ガーシェリスさんの家族。

ネソタ全州の狩猟税による収入がクマで年間2万5千ドル、シカで500万ドル。アメリカでは、狩猟税による収入は全て鳥獣の保護管理費にまわすので一日本でも建前はそうであるが実際は何故かそうになっていない、これらの金額がこの両種にまわされることになる。現在シカの基礎研究のプロジェクトはなく、クマの基礎研究費用として年間10万ドルが割り当てられ、このうち2人のクマ専属の研究員の給料に6万5千ドル、調査器材に3万5千ドルが計上されているという。この他の予算の大雑把な使い道は表に示した通りである。

アメリカでは航空機のチャーター料金は日本よりはるかに安く、1時間でおよそ50ドルだ。また飛行場があちこちにあり、人口9000人のグランド・ラピッズでも離陸後わずか5分で調査地の上空に達することができる。調査に対する森林局や狩猟者の協力が日本よりはるかに充実しているのは言うまでもない。予算の規模やこれら研究をするのに有利な社会的諸条件が日本と段違いであることを目のあたりにして、私は日本でクマの研究を現在の体制のまま続けることに、思わず無力感を感じざるを得なかった。

最終日の夜、食後のコーヒーを飲みながらオオカミの話をした。「北海道にもオオカミは生息しているか。」とガーシェリスさん。「かつていたが、絶滅した。」と私。すると彼は「現在ではアメリカにはアラスカ州を除いて、野生のオオカミが見られるのはここミネソタ州しかない。この個体群はカナダのそれと交流がある。」と誇らしげに語った。「しかし」と顔を曇らせ、「毛皮が高価なので今でも密猟が絶えない。ほら君が一昨日見たとおりだ。」私は一日の調査を終え、研究所に帰る途中に、キーンさんがトラバサミと皮を剥かれてひからびたオオカミの死体を見つけ、持ち帰ったことを思い出した。「我々はこの生き物を末長く守ってゆかねばならない。オオカミの生態の基礎研究もこれからの重要な課題だ。」彼は



ゆっくりと続けた。「現在ミネソタでは完全に保護されているが、オオカミの保護が一般社会から受け入れられるようになるまでに、多くの先人たちの努力があったのだよ。日本の状況はアメリカより厳しいかもしれない。しかし、君は野生生物の保護管理の必要性をこれから一般市民にアピールしていかねばならないよ。社会の理解は非常に大切だ。」私は黙って聞いた。今後何をやる必要があるか、日本でできることは何か、考えなければならなかった。

\*

\*

\*

ミネソタを去る朝がやってきた。快晴の空にいままでになく太陽がまぶしい。グランド・ラピッズの街には地吹雪が激しく舞っている。私が滞在していたあいだの“Very extraordinary”な陽気は去って、風はカナダから吹きつける切るように冷たい北西風に変わった。天気予報は明朝の最低気温が氷点下40度以下になることを告げている。ミネソタのクマたちも、いましばらくの眠りを必要とするのだろう。

ガーシェリスさんがバスディーポまで送ってくれた。別れの言葉がうまく出ない。固い握手をして別れた。まばゆい光の中をバスは走りだした。

表. ミネソタ州における鳥獣保護管理年間予算の大雑把なうちわけ

		狩猟税による収入	支		出
			研 究 (給料)	管 理 (装備)	
ク	マ	\$ 25000	\$ 65000	\$ 35000	0
シ	カ	\$ 5000000	\$ 22000	0	\$ 3000000
水	鳥	\$ 5000000	\$ 85000	\$ 50000	\$ 2000000

## イエローストーン国立公園にて

いつのまにか夜が明けていた。ハイウェイ沿いに牧柵と傾いた電信柱がどこまでも続いている。放置された巨大な農機具が流れる霧のなかに浮かび上がり、そのむこうが草地であることを教えてくれる。やがて牧柵はハイウェイから離れ、車窓は所々にロッジポールマツが見られるごつごつとした岩と砂の大地に変わった。空はどんよりと曇って、路面からは乾いた雪が舞った。何処までも単調な光景が続いている。

ミネソタをあとにした私は、モンタナ州のボーズマンに向かっていった。ボーズマンのモンタナ州立大学にはイエローストーン国立公園のハイイログマ研究チームのオフィスがあり、彼らのハイイログマ調査に同行させて頂くことになっている。ナショナルパーク・サービスのデヴィッド・マトソンさんあてに、到着予定についてミネアポリスから葉書を出してあった。

いつしか窓の外には樹木が目立つようになり、時折立ち寄る町の表情も心なしか明るくなってきた。バスはノースダコタ州を横断し、モンタナ州に入ったのだ。3月7日午後5時前、定刻より10分程早くボーズマンに着いた。バスディーポの待合室で待っていると、長身のマトソンさんが1歳になる息子さんを抱いて奥さんとともにあらわれた。

翌朝6時にマトソンさんの家を出発、一路イエローストーン国立公園の冬の玄関口ウエスト・イエローストーンへ向かう。ボーズマンでは曇っていたのが走りだして20分程で雨になり、やがてみぞれに変わった。道路の両側の急斜面はダグラスモミとロッジポールマツの森林に覆われ、沢沿いにはエンゲルマントウヒが見られる。左側が国立公園、右側が国有林だ。1時間半足らずでウエスト・イエローストーンの街に到着、スノーコーチと呼ばれる雪上車に乗り換え、そこから30マイルのところにあるオールド・フェイスフルへと向かった。多くの観光客はスノーモービルに乗って、国立公園の中へ行くようだ。何台ものスノーモービルがけたたましい音と排ガスをまき散らしながら、スノーコーチを追い越して行く。

スノーコーチは一般の観光客向けにイエローストーンパーク交通会社が運行している。走りだして間もなく、道路の脇を流れるマディソン川のほとりに、大きな黒い塊を見つけた。バイソンだ。乗り合わせた6人の観光客は天井のハッチを開いて身を乗り出し、カメラを構えた。初老の夫人が歓声を上げた。そして今度は右側にエルクジカ、先行する別のスノーコーチも停止して客が写真を撮っている。そのうちに開けた所まで来ると、何頭ものエルクやバイソンが降りしきるみぞれの中、採食しているのがわかった。道路からの距離は近いものでは5メートル以下、頼めばすぐ前で停車してくれるのでじっくりと観察することができる。あまりにも簡単に観察できてかえって何かピンとこない。マトソンさんが国立公園内のエルクの頭数は2万、バイソンが2千と教えてくれる。

1時間40分程で終点のオールド・フェイスフルに到着、レストハウスでジェフさんと会う

た。パーク・サービスのジェフさんはマトソンさんとともにハイイログマの調査をしているメンバーの一人だ。彼らのベースとなっているトレーラーハウスで遅い昼食をとり、午後からいよいよ調査に出発だ。

イエローストーン国立公園は面積およそ9千平方キロメートル、公園全体が巨大なカルデラであり、あちこちに温泉が沸いている。国立公園の中西部、オールド・フェイスフルのあるガイサー盆地周辺が、マトソンさん達の春の主要な調査地だ。南北約5キロメートル、東西約1.5キロメートルの盆地の至る所に温泉が沸いており、有名な間欠泉もある。冬の間に死亡するエルクジカやバイソンが、冬眠から覚めたばかりのハイイログマの重要なエサになるため、ハイイログマ研究チームは、3月初めからこれらの動物の死体の位置や、コヨーテなど他の動物による死体の利用状況などの記録をとっている。草原のシカやバイソンの死体の位置の記録は、林縁からどれぐらいの距離までならハイイログマがでてきて死体を利用するかを調べるためのものだそうだ。遊歩道から外れて歩きだして間もなく、昨年にも生まれたバイソンの子の死体を見つけた。「死んだのは2〜3日前、死因はコヨーテに襲われたことによる。」マトソンさんとジェフさんが相談しながら、ときばきと記録してゆく。成程、近くに残る雪の上にはコヨーテの足跡が点々と続いている。最後にマトソンさんが「利用率はどれぐらいと思うか？」と問いかけてきた。「55パーセントくらいか。」私が答えると、「私は60パーセントと見積もり、ジェフさんは50パーセントとした、よし55パーセントにしよう。」とマトソンさんが笑った。

地熱で雪がだんだら模様になって残っている地表のあちこちから摂氏95度の温泉が沸きだし、雪を解かしてぬるま湯となった流れは川へと注いでいる。その中の一つをのぞきこんだ。青く澄んだ丸い熱湯の溜りにはブクブクと泡が立ちのぼっている。「こんな立派な温泉を何故利用しないのですか。日本人なら風呂や熱源に使っていますよ。」

と聞くと、「熱湯だよ、入れるものなら入ってみたら？」と笑う。そして「ここは地熱も自然のままにしておき、利用しないのだ。」しかしそのすぐわきには四車線の舗装道路がある。これを建設することはこの自然を手をつけずに保護することなのか。また、森林を帯状に伐採したなかを送電線が麓から延びていることも知っていた。雪を掴んで温泉に投げ込みながら、何か矛盾を感じた。

あちこちに見られる枯死したロジポールマツは、この地球の営みがいかに気紛れである



シカやバイソンのエサになるイネ科の草本を調べるマトソンさんとジェフさん。ワイオミング州イエローストーン国立公園にて。

かー温泉の吹き出す場所と温水の流れが時とともに変ることーを告げている。黒くたれこめた雲から時折雪が激しく舞う。流れる湯気の中に枯死マツが幽霊のように浮かびあがる様は、まるで地獄絵図のようだ。“Be very carefully!”、厳しい表情でジェフさんが声をかけた。「温泉の周囲の石灰岩は非常にもろく危険だ。」とマトソンさん。12年間ここで野生動物の生態調査を続けてきたジェフさんは、「バイソンが4本とも足を踏み抜いて熱湯の中に落ち込み、もがき苦しみながら死んでゆくのを見たことがある。」という。しかし、この地熱こそが積雪を解かし、エサになるカヤツリグサやイネの仲間の草本を冬期にも利用可能ならしめ、ここに多くのツカとバイソンが生息していることのカギになっている。

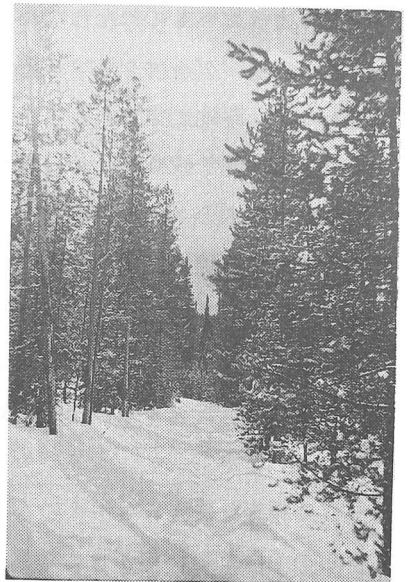
マディソン川の流れに沿って降りていく。地熱のないところでは積雪が50センチメートル、スノーシューがないと太股まで埋まる。雪の中で悪戦苦闘する我々を3頭のミュールジカが見ていた。やがて日が暮れて足元が見えにくくなった頃、道路に辿り着いた。西の空にはわずかに晴れ間が見える。バイソンやエルクは流れる湯気の中に昼間と同じように立って夕暮れをむかえていた。路上の雪はスノーモービルによってならされているとはいえ、高い気温によってザクザクにくさって歩きづらい。疲れた足をひきずって歩いてゆくと、彼方の森からもの悲しげな遠吠えが聞こえてきた。それに答えるかのように別の遠吠えが応じる。「コヨーテだ。」マトソンさんが立ち止まってつぶやいた。私は盆地を渡る風の匂いをかぐように、声のする方向へ鼻をつきだし目を細めた。マトソンさんとジェフさんもじっと同じ方向を見ている。また降りだした雪が視界を見る見る消してゆく。遠吠えは盆地の周辺の山々にこだまし、いつまでも続いた。

\*

\*

\*

良い天気にも恵まれた翌日は3人で踏査、午前中にエルクの死体を2つとバイソンの死体を1つ発見した。午後からジェフさんは愛犬のハスとともに散歩に出かけ、私はマトソンさんと盆地をとりまく外輪山の森林に足を踏み入れた。スノーシューを履いて急な斜面を登りきると平坦な台地が広がった。台地はロッジポールマツの純林によって覆われ、盆地では至る所で見かけたバイソンやエルクの痕跡が全くない。「ここの林床にはわずかなブルーベリーが見られるだけで、雪が消えると乾燥し、岩と砂が露出する。そしてこのようなロッジポールマツの純林が何十キロメートルにもわたって連なり、国立公園の八割を占める。」とマトソンさんがマツにもたれかかりながら話してくれる。「この盆地の周辺で冬眠して



ロッジポールマツの林。

いる個体は、冬眠明け直後に盆地で死肉を食べる。だが夏になると向こうの中央高地を越えてイエローストーン湖の方へ草本を食いに移動してしまう。ここには一頭も残らない。このロッジポールマツの林はクマにとって、採食場としての価値はゼロに等しい。我々はこれをロッジポール砂漠と呼んでいるのだ。」彼は笑いながら言った。「しかしブルーベリーはクマにとって良いエサにならないか。」と私。それに対し「その通り、だがロッジポールマツ林のブルーベリーはほとんど結実しないのだ。」とマトソンさん。さらに「イエローストーンのハイイログマの食性に動物質のものが占める割合が高いのは、春先に他の地域では重要なエサとなる草本や前年の果実がここでは乏しいためだ。だから、それだけシカやバイソンの死肉に依存する割合が高くなっているのだ。」

森林のなかをあちこちと見て歩きながら、エゾヒグマの生息する北海道の森林が本来はいかに変化に富み、エサの種類も量も豊富であるか、を実感していた。これまでに知られているエサの項目数がイエローストーンのハイイログマで38であるのに対し、北海道のヒグマでは倍以上の92であることもこれを裏づけていると言えるだろう。イエローストーンのハイイログマの行動圏は、北米大陸のハイイログマの中で最も広い。それは季節ごとにエサのある地域に限られ、またそれらの距離が離れて分布していること、そしてほとんどが採食地としては不適なロッジポールマツの林で覆われていること、これらの環境要因によるところが大きいということが膚でわかった。

グリセードのできない重いスノーシューズで斜面を下り—実際彼らの使っているスノーシューズは斜面では北海道のカンジキとは比べものにならないほど不便だ—、エンゲルマントウヒが多い沢に入った。湿地に見られるエンゲルマントウヒは樹高が20メートルに達し、日光にある並木のスギのような迫力がある。成育する環境は北海道のアカエ



パーク・サービスの女性レンジャーと話をするマトソンさんら。

ゾマツに似ているが、形態的にはクロエゾマツに近いようだ。沢沿いに降りて行くと、雪の落ちた斜面でエルクがエサを食っていた。「ディスターブを与えないように。」とマトソンさんは沢を渡り、シカのいない反対側の尾根へとコースを変更した。

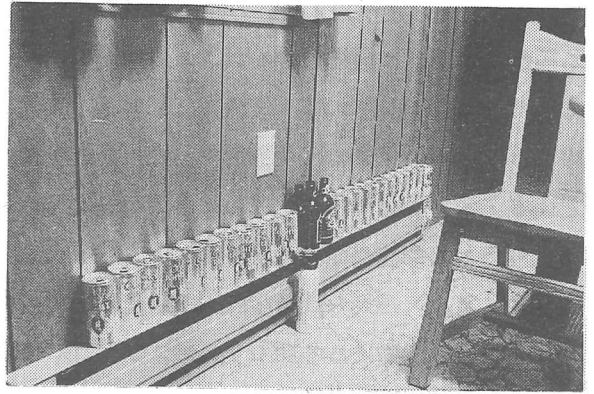
\*

\*

\*

一日の調査を終え、エルクのハンバーグとミュールジカのソーセージの夕食—これはジェフさんの手作りで、塩がきつかったことを除けば美味しかった—を食べ、ビールを飲んだ。ジェフさんはハスをしきりにほめ、可愛がっている。午後からスキーを履いて散歩に出かけ

たところ、昨日来行方不明だったスキーヤーを発見、救助したのだった。ニューヨークから遊びに来ていた観光客が軽装備でスキーをしに森に入ったまま雨混じりのみぞれの降る夜になっても戻ってこず、マトソンさんとジェフさんが「もう絶望的だろう、可愛そうに。」と前日の夜に話し合っていたことを思い出した。行方不明になったスキーヤーは一晩中歩き回っていたようだ。発見



マトソンさんらと3人で2日間に飲んだビールの空き容器。手前に見えるのはトゥガラシ液入りスプレー。

した時には半分幻覚状態で、死ぬ一歩手前だったという。名前を聞いても答えることが毎回バラバラで、ジェフさんにスキーのポールで突きかかってきたりしたそう。発見した場所は行方不明になった所から5キロメートルも尾根を登った所で、「何故、彼は山を降りずに奥へと登ったのか？」と聞くと、首をかしげて「それが分かったら苦労しない。」とジェフさん。「しかし、無事発見されて良かったですね。」と私が言うと、「だから都会人は困るのだ。」と無然とした表情だ。

マトソンさんが「ここに来ている観光客についてどう思うか。」と聞いてきた。所かまわずけたたましい音をたてながらスノーモービルで走り回り、あるいはスノーコーチの中で酒を飲み、乗務員の説明もろくに聞かない観光客がいたことなどを思い出した私は「あまり好ましくないと思う。」と答えた。「その通りだ。」二人は言った。アメリカでも国立公園のあり方について多くの論議がある。自然の生態系を維持し、自然教育の場としての役割と、一般市民に広く解放したレクリエーションの場としての役割の調整が最大の悩みのようだ。彼らは言う。「ニューヨーカーやカリフォルニアンは自然に親しみながら学ぶということを取り違えている。自分の足も使わずに我がもの顔にやってきて、好きなことをして帰る。野生動物に対してエサをやったり、また不用意に近づくので怒ったバイソンに殺された者もいる。」話を聞きながら、日本の国立公園と同じような問題点を抱えていると思った。ただ根本的に違うことは、アメリカの国立公園が林業経営と切り離されていること、国立公園当局に保護管理や基礎的な調査をする機構と予算があることである。ちなみにイエローストーン国立公園のレンジャーはオフシーズンで50人、夏期にはその十倍の500人に達する。この他に多くの生態研究者がいる。

マトソンさんとジェフさんが今年の研究計画の話をしている。ハイイログマが春から夏にかけて草本を食うが、食性の季節的な移り変わりを草本の栄養的な変化と関連させて説明しようとしているようだ。横で聞いていたところによれば、10メートル×100メートルの帯状

植物調査区を10箇所設定し、ハイログマの掘り跡の季節的な変化を記録する。よく利用する植物は定期的に採集し、モンタナ州立大学で栄養分析を行うというものだ。これは我々が知床や大雪で1984年に試みた調査と、考え方は全く同じである！。この調査は6月から8月まで5千ドルの予算で行う予定で、モンタナ州立大学の大学院生が手伝うことになっているという。我々の調査では予想された傾向は出なかったが、果たしてイエローストーンではどうだろうか。今後の発表に期待したい。熱っぽく考えを語るマトソンさんと、黙ってうなずくジェフさん。二人の真剣な討論は夜遅くまで続いた。

スノーコーチによる冬期のサービスが翌日に終わり、従業員の引き上げ隊が朝7時にオールド・フェイスフルを出発することになった。私はマトソンさんとともに、あわただしく帰る支度をして最終便に乗り込んだ。ジェフさんはここに残って、調査を継続、3月の下旬には冬眠明け後のハイログマを追って、泊まりがけの踏査をするという。一年のうち10カ月はフィールドにでているというジェフさんは33歳の独身、別れるとき日に焼けた顔の厳しい目がかすかに笑った。

ポーズマンのモンタナ州立大学構内にあるハイログマ研究チームのオフィスに案内してもらおう。研究室の壁にはりだした地図を見た。イエローストーン国立公園が周辺の開発によって完全に孤立しているのがわかる。発信器が机の片隅に置いてある。現在7頭のクマに発信器を装着しているそうだ。航空機による追跡は、クマが冬眠から覚める3月下旬から開始されるという。マトソンさんが文献のコピーを沢山くれた。北海道のクマについての文献を後から送ることを約束した。

\*

\*

\*

手を振って見送るマトソンさんの家族が遠くなった。バスの中で、わずか3週間ではあったがそれまでの充実した体験を思い起こして、満足していた。素晴らしい人々に出会った。素晴らしい自然や動物達に出会った。日本に帰ったら私は何から書き出せばよいか、何を伝えればよいか、あれこれと考えるが頭がまとまらない。

バスは雪のカスケード山脈を越え、一路下ってゆく。窓外には芽を吹き出したヤナギや満開のサクラが民家の庭先に目立つようになった。シアトルは近い。そして太平洋の向こうにエゾヒグマの住む北海道がある。

(終わり)

## こぼれ話

間野 勉

## ○シカゴにて

3月1日朝6時ごろ、私はグレイハウンドのバスディーポに着いた。腕の時計は既に7時を過ぎているが、東部時間から中央時間変わったため、シカゴはまだ6時になったばかりだ。ワシントンDCから一緒の、くそ重くかさばるダンボール箱（これにはクマ会議会場やスミソニアン博物館で手に入れた本や文献などが入っていた）と、クリーブランドから乗り合わせ、私の席まで尻がはみだし、あまつさえ足を払げてもたれかかってくる金髪のネーチャンに挟まれ、眠れぬ夜をバスの中で過ごした私は、足元にある本の入ったダンボール箱を何とかせねば、と思いながら待合室のベンチに腰掛けていた。私の前では輪行用のバッグを持った東洋人のネーチャンが袋を広げると、おもむろに自転車を組み立て始めた。黒人のガードマンが「お前は何をやっているのか」と、顔色をかえて飛んできたが、「カウンターに断わったのだ」と応ずるとガードマンは引き揚げていった。アメリカの都会のバスディーポには、必ずガードマンがいる。浮浪者や乞食のたまり場になることを防ぐため、バスの切符を持っていないとベンチのあるところへは入れない仕組みになっている。

暫くしてその東洋人が、日本人ですかと日本語で問いかけてきた。そして「卒業旅行ですか？ 僕は今日シカゴを見て回るのですけれども、あなたもですか？」いやに丁寧で慣れ慣れしい。彼は上智大学物理学科の4年生で、自転車を持ってバスで移動し、都会に着くたびに走り回っているという。こちらが何も聞かなくとも一方的に話しかけてくるのでふんふんと適当に答えていたが、私がいかに観光には熱心でないということを感じたらしく、それなら何で来たのですかと聞いてくる。仕方なく、まあ学会のようなものに出席しに来たのだ、と答えると「へー、たいしたもんですねえ。僕、目的をもって旅行する人って尊敬しちゃうな。僕なんてそこの卒業旅行と変わらないもんさ」。そのうちに「僕、顔を洗ってきたいんだけど、荷物を見てくれませんか」と言っていなくなった。変な奴だったが、悪い人間ではなさそうだ。ダンボール箱を日本に送るため郵便局に行っている間、荷物を彼に見てもらおうことにした。洗面所から戻った彼に、20分で戻るからとザックとバッグを押しつけて、ダンボールを抱えて朝のシカゴの街へ出た。

朝8時すぎのダウンタウンは、土曜日のせいか人通りも少ない。郵便局への道を聞くには通行人が一番、とあたってみた。最初に聞いた人が「荷物を送るならグレイハウンドの宅急便だ」というので、あたふたとまたバスディーポへと戻り、荷物のカウンターに問い合わせると、海外には送れないとのこと。冷静になって考えてみれば当たり前であるが、そのときの私はかなり焦っていたようだ。街の中を重い荷物を抱えてうろうろしながら、その後何人かの通行人をつかまえて聞いてみた。みんな道順は親切に教えてくれるのだが、郵便局がど



こにあるのがさっぱりわからない。15分ぐらいウロついた後、私は意を決してタクシーを拾うことにした。沢山走っているタクシーもいざ拾うとなるとなかなか拾えない。ますます焦ってようやく1台の黄緑色の車を止めた。“Take me to the nearest post office!” 車に乗るなり私は叫んだ。「そしてそれが終わったらグレイハウンドバスステーションにやってくれ。」“OK” 快く応じた運ちゃんは車を走らせた。「まだ9時前だが、中央郵便局ならやっている。」小柄で小太り、頭をはげで度の強いメガネをかけた、いかにも人の良さそうな運ちゃんだ。3分で着き、「俺はここで待っているから、行って来い」。私はダンボールとともに重厚な建物に入っていった。

アメリカの郵便局はともかく広い。広いロビーにはベンチもなく、そのむこうにカウンターがある。重いダンボールをカウンターにさしだすと、おねえさんが荷札をくれて、“You need a ‘EMBAK’.” 私が「エムバク?」と聞き返すと“Ya, EMBAK.” そしてそのエムバクなるものは彼女が指差す方向で手に入れるらしいのだが、よくわからない。次の客が来たので私はカウンターを離れた。そして重いダンボールを抱えたまま「はて、青井さんたちがウィリアムズバーグで荷物を送ったときには、こんなことにならなかったはずだが」などと考え、再びカウンターに並んだ。しかしまた同じことを言われ、納得して? カウンターから離れた。「分かったような気になっているが、やっぱり分かっていないのだな」などとブツブツと独りうなりながらロビーに立っていると、タクシーの運ちゃんが、いつまでも何をやっているのか、と心配して入って来た。彼は私の途方にくれた様子を見ると、カウンターに問い合わせにいった。そして事情を知った彼は、「俺がここで荷物を見ていてやるから、お前はエムバクを買って来い。」そしてそれは1ドル40セントなのだそうだ。私は今度こそわかったような気になり、‘エムバク’を捜しに広い郵便局の中を走り回った。しかし切手と葉書の自動販売機以外、ガラんとした構内には何も無い。思わず自動販売機に駆け寄ると、44セント切手の5枚綴りを買って戻った。運ちゃんは呆れ果てて、「よし、お前はここで荷物を見ていろ。俺が買って来てやる。」悲しいやら情けないやらでがっかりしているうちに、彼はかますのようなズタ袋を持って来て「これに入れよう。」しかしあと一息のところ袋が小さくて入らない。彼謂く「これではだめだ、エルバクにしよう。」ああ、そのときになって私は初めて‘エムバク’が‘M-Bag’であることを理解したのである。

それから先はトントン拍子に手続きが進み、私は無事荷物を発送することができた。バスディーポに戻る車中で、運ちゃんは気さくに話しかけてきた。私が日本人であることを知ると「俺は朝鮮戦争のとき2年間東京の横田基地にいたことがある。日本はよい国だよ。」私は彼の親切にすっかり感激してしまっていた。7ドルのタクシー代に対して10ドルの小切手を渡し「お釣りはとっておいて下さい」と言ったのはいうまでもない。

1時間余りして戻った私を、上智大学のニーチャンは首を長くして待っていた。私は、

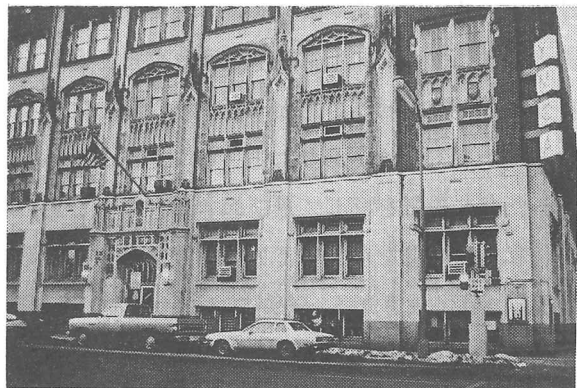
「面白い一時だったわい」と独り満足していたが、彼には気の毒なことをしたと思い、厚く礼を言って別れた。シカゴのオヘア国際空港へは地下鉄で30分。うっとおしい荷物を無事片付けてほっとし、また心暖まるアメリカ人の親切にほのぼのとした気持ちになり、期待に胸ふくらませてミネアポリス行きの飛行機に乗り込んだのであった。だが、その高揚した気分は8時間後には無残にも打ち砕かれ、不安のどん底に沈むことになる。

## ○ミネアポリスにて

シカゴから空路ミネアポリス入りをした私は、空港で翌日の航空券の手配も済ませ、ダウンタウンにあるグレイハウンドのバスディーポに降り立った。そびえたつ摩天楼に午後4時過ぎの夕日があたってミカン色に輝いている。あちこちに水溜まりができ、泥をはねあげながら車が走っていた。まるで札幌の3月のような陽気だ。飛行機の中で隣り合わせた夫人が「ミネソタは雪も多く寒い所よ」と話してくれたので、いよいよ北国へ行くものと身構えていたが拍子抜けであった。泊まる場所をまだ決めていなかったので、ぶらぶらと町の中を歩きながらホテルを捜した。「昨日はバスの中だし、今夜はゆっくり眠って明日のグランド・ラピッズ行きに備えよう」。歩きだして10分足らずでYMCAをみつけたので深く考えずに入ってしまった。

カウンターで宿泊手続きをして鍵を受け取った。9階のシングルルームだ。治安のため部屋の鍵をエレベーターの操作盤に差し込むようになっており、鍵を差し込んで初めてエレベーターが動くようになっている。9階に着いた。廊下に何人かの黒人がたむろしていて、皆が私のことを見た。視線をそらしながら部屋に入った。トイレもバスもない。古い建物で、窓枠は木でできている。荷物を片付けると、食事でもするかと外にでた。

エレベーターのところまで来ると、さっきの黒人たちが私のことを待ち構えるようにたむろしている。そのうちの一人がクォーターを二枚左手でもてあそびながら、エレベーターを待つ私に向かって、聞き取りにくい言葉で何かを喋った。金を要求していることは直感ですぐにわかった。相手にしないでいると、なおもしつこくからんでくる。やがてエレベーターがやってきて乗り込むと彼らも乗り込んできた。ねちねちとからんでくるのに対し、「まねー？」とぼけていると彼は「俺たちは5人だ。お前はたったひとりでやる気か？」と腕をまくってこぶしを作って見せた。他の黒人たちがどっと笑った。自分よ



ミネアポリスのダウンタウンYMCA。

りはるかに背の高い彼らを見上げながら、この事態をどう打開するか考えた。着ているダウンのポケットには小切手と、8ドル位の紙幣がはいっているはずだったが、とっさに日本語で「俺、英語わかんねーや。金なんか持ってねーや」ととぼけると、「金を出せ！」と首に手をかけ、壁に押しつけられた。

ドアが開いた。一階に着いたのだ。ロビーには人がいた。彼らは何か言い残して、笑いながら出ていった。「あいつらはここに巣くっている不良にちがいない。また会えばろくなことは無いだろう。泊まる所をかえるか？。しかしもう時間も遅い」。不愉快と不安が入り混じる思いで町を歩いた。部屋には水道も無かった。食事を済ませるとジュースなどの飲み物を買って、早めに帰った。幸いにもあの黒人たちには出会わずに済んだ。エレベーターで乗り合わせた2人の女の子が降りるときに、“Have a nice stay.”と歌うように言って、にっこりと笑った。そしてその通り、とんでもない“nice stay”を過ごすはめになるのである。

トイレに行ってすぐに明かりを消して寝たが、落ち着いて眠れるはずがない。「このままでは済まないだろう。あいつらはきっとまたやって来る。そうだ、荷物を整理しておこう。それからどこか逃げ道はないか。」部屋の中をあちこちと調べた。しかし9階の窓から逃げられる筈がない。あきらめてベッドに上がった。周囲の部屋の主がどやどやと帰ってきた。やがてどこかでキーボードを鳴らす音、ボリュームを一杯にしたラジオカセットから流れる音楽、笑い声やなにか言い争うような声も聞こえてくる。

スチームが強すぎるくらいにきいてきた。うとうとしかけると、ノックの音で目がさめて飛び起きた。誰かが廊下で息をひそめて部屋の中の様子をうかがっている。ベッドの上に半身を起こして身構えた。こんなところに知り合いがいるはずがない。息詰まるような時間が過ぎてゆく。ついにドアのノブがガチャリと音をたてた。薄暗い入り口のほうを凝視した。鍵のかかったドアは開かなかった。ドアの外の気配は去っていく。手にした鍵には複製を作ることが違法であることが刻印されているが、そんなことを気にする相手でないかもしれない。また、部屋にはこの鍵が一つだけで、ドアチェーンもない。電話もなくカウンターに助けを求めるわけにもいかない。「とんでもないところに泊まってしまった」と後悔するが、あとのまつりだ。「もし踏み込まれたらどうしようもない。抵抗せずにおとなしくしよう」自分に言い聞かせる。あとはちゃちな鍵を信ずるしかないのだ。

それからもいれかわりたちかわり、誰かが私の部屋の前までやってくる。外に人の気配がするたびに殺気を感じて飛び起きる。じっと息を殺して中の様子をうかがっているのが分かり、私も中で息を殺してドアのほうを目を凝らして見ている。「誰だ？何か用か」と叫びたい衝動を漸くおさえる。やがてノックの音。全身がまさに総毛立つのが分かる。諦めて？去ってゆく足音……。こんなことが何回続いたのだろうか。「眠っているときに襲われるのが一番恐ろしい。眠ってはいかん」と言い聞かせた。緊張と興奮でくたくたになった。

目がさめてハッと飛び起きた。無事生きている。部屋の中も何事もない。外は明るくなっており、時計を見ると7時半。他の部屋は静まりかえっている。遅くまで騒いでいた連中も今日は日曜ということもあってか寝ているようだ。このままチェックアウトできればこの忌まわしいところから抜けだせる。9時前に意を決して鍵を開けて外へでた。廊下には誰もいない。エレベーターを待つ時間がいやに長く感じられた。

ついにチェックアウトを済ませた。カウンターの中でのんびりと話をしていたYMCAの若者に昨晚のことを話し、「どういうことか?」と問いただした。しかし、それに対する答は「各人はおのおのの責任で身を守らなければならない。君はそのようなめにあいながら何事もなかったのは運が良い。不良がいるのもまたアメリカの現在の日常なのだ。」割り切れない思いでYMCAをあとにした。

治安維持のために、チェックインするときには身元を確認され、また建物の中には宿泊客以外は入れない(エレベーターを利用できない)仕組みになっているにもかかわらず、宿泊者の仲間に不良がいることによってこれらは何の役にも立っていなかったわけだ。あとで同じミネソタ州の地方に住むクロクマの研究者の話では、ミネアポリスのダウンタウンは彼も雰囲気が悪いと感じているという。私の体験を話したところ「君はもう少しでただでは済まないところだった。YMCAのなかには不良の溜り場になっているところがあるということは聞いていたが、それはニューヨークなど大都会に限ると思っていた。まさかミネアポリスまで……」と驚いていた。その後の旅で、私が宿泊には特に慎重になったのは言うまでもない。